



# 営農情報

第60号 平成29年6月2日

## 「あまおう」6月の管理

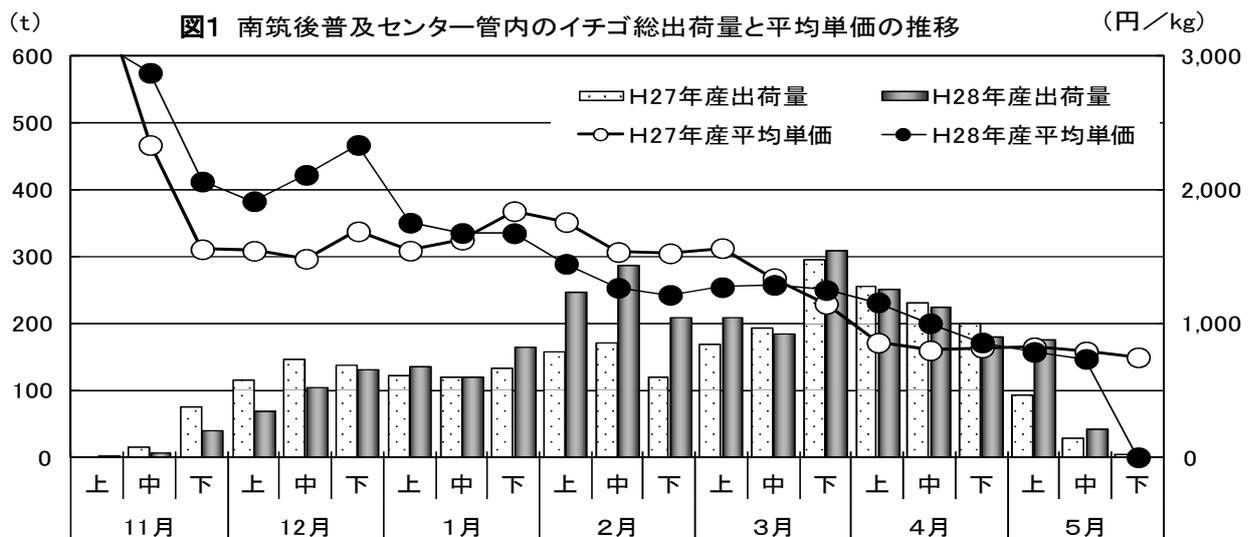
南筑後普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

### 10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

平成28年度産は例年と比較し、1番果～3番果が連続したことにより、10a 当たりの数量、平均単価ともに前年を上回る年となりました。特に、2月の上・中旬の収量の伸びは大きくなりました。これは1番果の着果負担が少なく、1～2月の日照時間が平年より2割長かったことが影響したものと考えられます。また、うどんこ病やダニの発生が平年より少なかったことも増収につながったものと考えられます。

一方で、①親株からの切り離し遅れや梅雨時期の根傷みによる苗の充実不足、②8月下旬以降の降雨による定植準備の遅れ、③苗の充実不足による1番果房の小玉化と果形の乱れ、④定植後の炭そ病多発等の課題が残りました。

高収量を確保するためには、まず充実した苗の確保が重要です。平成29年度産に向け、作型に合わせた、計画的な苗作りを行いましょ。



全農ふくれんデータ

## 今後の管理

### 〈育苗目標〉

- ・ **クラウン径 10mm以上の良苗作り** (収量確保)
- ・ **病害虫のない苗作り** (炭そ病、ハダニを本ほに持ち込まない)
- ・ **作型に合わせた苗作り** (まず、作型を決めましょ)

今年はランナーの発生が遅れています。また、親株のかん水が不足したほ場や、花梗除去が遅れたほ場では、子苗数の発生が少ない状況です。

親株からの切り離しが遅れると「炭そ病」に感染する危険性が非常に高くなります。降雨前・後の予防防除を基本に、罹病株の早期発見・除去など、「炭そ病」対策を徹底して下さい。

今年は「ハダニ類」や「アブラムシ」の発生が多く、「うどんこ病」の発生も見られます。適期防除に努めましょ。

## 採苗

炭そ病の感染が爆発的に拡大する「梅雨入り」前に必ず予防防除を行った後、親株から切り離しましょう！

### 【 さしポット 】 《 目標鉢上げ時期 》

8月処理開始の株冷	⇒	6月10日まで
8月処理開始の夜冷 9月処理開始の株冷	⇒	6月15日まで
9月処理開始の夜冷 普通ポット	⇒	6月20日まで

- 子苗採取前に、必ず、「炭そ病」の予防散布を行う。
- 本葉2～3枚で、3～5cm発根した苗（それ以上伸びていれば切る）を用いる。
- ワラ被覆床では、採苗の1週間前からワラにかん水して子苗の発根を促進する。
- 活着を良くするため、鉢上げ前日に培土を十分湿らせておく。
- 極端な浅植えや深植えはしない。
- 鉢上げ後7日程度は、黒寒冷紗（610番）等で遮光して乾燥を防止する。
- 活着するまでは、葉水程度のかん水を1日に数回行う。
- 「炭そ病」対策として、採苗は雨の日を避け、気温の低い早朝に行う。
- 採苗後は苗が乾燥しないよう日陰に保管し、できる限り早く鉢上げする。
- 採苗当日に鉢上げできない場合は、苗が乾燥しないように湿らせた新聞紙に包み、2～3℃の予冷库内で保存する。（保存期間は3日間まで）

※ 苗の発根促進・活着促進のために  
タチガレン液剤 1, 000倍（挿し芽採取時 30分間挿し芽浸漬）

### 【 すけポット 】

- 降雨などで硬くなった培土は、根づき（根の入り）が悪いので、鉢土をほぐす。
- 鉢受け期間中は、「炭そ病」の定期的な防除を行う（特に鉢受け作業後）。
- 鉢土が乾燥すると根の伸張が悪くなるので、乾燥している場合はかん水を行う。
- 徒長防止のため、切り離し前の子苗への施肥は基本的に行わないが、窒素切れの場合は液肥や置き肥を施用する。
- 必要数の子苗を受け終わったら、ランナーの先端を切除する。また、子苗の徒長防止と病害虫発生防止のため、親株の全葉摘除と直後の防除を行う。
- 子苗の切り離しは、最終鉢受け後10～15日目頃（根づいた頃）を目安に行う。ただし、雨天時や苗が濡れている状態では絶対に行わない。

（裏面へつづく）

# 切り離し後の育苗管理

## 【 肥培管理 】

「炭そ病」対策として、**窒素過多**にならない管理を徹底しましょう。

- 活着したら、追肥（置き肥）を開始する（例：IB化成S1号で1～2粒/ポット）
- 活着後、2回程度液肥を施用する（例：OKF1で1,000～1,500倍）。
- 軟弱徒長させないため、梅雨時期は肥料を効かせすぎない。
- 肥料切れする期間がないように、液肥で肥効を調節する。

## 施肥事例

対象作型	置肥（IB化成S1号）			最終追肥 （液肥かん注）
	1回目 （6/下）	2回目 （7/中）	3回目 （8/上）	
<b>株冷・夜冷</b> （8月に低温処理開始作型）	1～2粒	1～2粒	—	Ⅲ型：8月 5日 Ⅳ型：8月10日 Ⅴ型：8月15日
<b>普通ポット等</b> （9月に低温処理開始作型）	1～2粒	1～2粒	1～2粒	9月初

## 【 かん水 】

- 過湿にならないよう、鉢土の乾燥状態（根の状態）を常に観察してかん水を行う。
- 活着後は午前中主体のかん水とし、徒長防止と「炭そ病」予防のため、長時間濡れ状態にしない。特に、夕方のかん水が必要な場合は葉水程度とする。
- 2.5寸ポットや棚式育苗は乾きやすいので、こまめにかん水する。

## 【 葉かぎ 】

- 葉かぎは、活着後根が十分に回ってから開始する。
- 葉数3.5枚を確保するように、古葉の葉かぎを行う。
- 雨の日は絶対にしない。
- 葉かぎ後は、必ず、当日もしくは翌日に「炭そ病」の防除を行う。

## 【 病虫害防除 】

昨年度は、育苗時～本ば定植後に炭そ病が多発しました。育苗期の①予防、②観察、③周辺株を含めた罹病株の廃棄を徹底しましょう！！

## <炭そ病>

炭そ病菌は、雨やかん水で保菌株から周辺株に飛散し、感染・発病する。

- 定期的な防除、降雨前後の防除及び葉かぎ後の防除に心がける。
- 発病株と周辺の株は、ほ場の外へ持ち出し処分する。
- ポット間隔をできる限り広くとる（18cmの間隔は確保する）。
- 育苗床の排水対策を講じておく。
- 育苗中の雨よけは、病原菌の飛散防止に効果が高い（特に梅雨期）。

## ＜疫病＞

梅雨時期から発生し始めるので、定期的な防除に心がけてください。なお、対策については「炭そ病」の項目を参照してください。

## ＜ハダニ類＞

平成 28 年産でも本ぼでハダニ類が多発したほ場があります。

ハダニ類は外からの飛び込みはほとんどなく、イチゴの栽培サイクルの中で世代交代を繰り返します。そのため、いずれかのステージ（親株・育苗・本ぼ）でハダニ類発生を断ち切ることがポイントとなります。

育苗期は葉数も少なく薬液がかかりやすいため、育苗期での防除を徹底し、本ぼに持ち込まないように心がけましょう。

## 本田の土づくり・土壌消毒

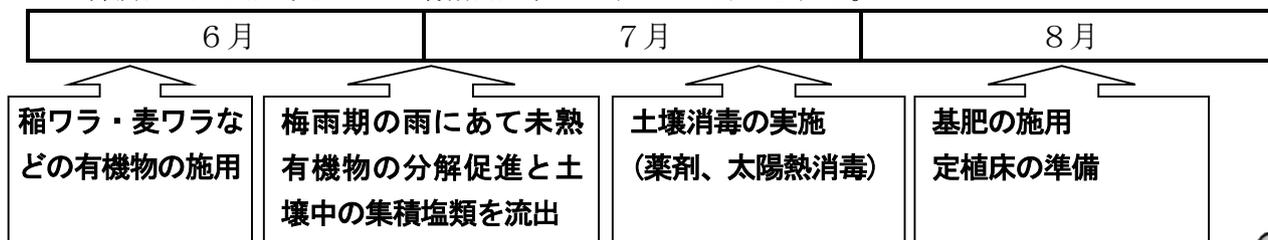
近年、8月末から9月にかけて雨天日が連続する傾向です。本ぼ準備は、余裕を持って早めに行いましょう！！

### ● 有機物の施用

- ▶ イチゴ栽培で消耗する土壌有機物の量は、堆肥約 2 t / 10 a 分に相当する。
- ▶ 稲ワラ・麦ワラ・家畜ふん堆肥等の有機物は、梅雨前に投入して土壌混和し、梅雨期の雨に十分あてる。（分解促進、塩類溶脱のため）

### ● 土壌消毒

- ▶ 薬剤による消毒または太陽熱消毒のいずれかを実施する。



～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～  
”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！